

参加型作品 観客と対話



難民と観客が一緒に照明器具を作る
オラファー・エリアソンのワークショップ



57回目となる今回、仏パリのボンビドゥー・センターのチーフキュレーター、クリスティーヌ・マセルが総合ディレクターを務めた。彼女が提示したテーマは「ピバ・アルテ・ピバ(芸術万歳)」。

芸術がもたらす効果に希望を持ち、芸術自体への礼賛を目指した。前回は社会や歴史の暗部に焦点を当てた作品が際立ったが、今回は「確かな印象の作品が多い」との声も聞かれた。約120組が参加した企画部門では、観客参加型の作品が目立った。デンマーク出身のオラファー・エリアソンは、難民と観客が一緒になっ

イタリア・ベネチアで隔年開催される世界最大規模の現代美術の国際展「ベネチア・ビエンナーレ美術展」が、11月26日まで開かれている。中心となる企画部門と国別参加部門では、先鋭的な作品が多かった前回からの揺り戻しもあってか、作家たちはより穏やかな手法で自己表現に臨んでいた。

(文化部 森田睦)

ベネチア・ビエンナーレ美術展

国別部門 政治性帯びた展示

国別参加部門には86か国が参加。国単位という出展形態から政治性を帯びるのは避けがたく、自国の歴史や現状に呼応した作品が多かった。金獅子賞を獲得したドイツ館では、気鋭のアンネ・イムホフが約5時間のパフォーマンス

で多面体の照明器具を組み立てるワークショップを展開。共通体験や対話を通じた相互理解の場を作った。ブラジル出身のエルネスト・ネットは、網状のテントの中で観客にアマソンの先住民の呪術的な儀式を疑似体験させ、そこから社会の様々な局面で求められている「変化」に思いをはせてもらった。ドイツ出身のフランク・エールハルト・バルターは、中に入ることのできる色鮮やかな布の立体作品で金獅子賞を獲得

得。台湾出身のリー・ミンウェイも観客と向き合い、布を縫うプロジェクトを披露した。いずれも芸術を一方的なメッセージの伝達手段でなく、相手との意思疎通が可能な双方向的なものとして捉えており、様々な社会問題の解決に役立てようという温かみを感じさせる作品だった。日本からは菅木志雄、関西の美術芸術集団「THE P L A Y」(具体美術協会)で活躍した松谷武判、実力派の島袋道浩や田中功起が出品した。

日本館の沿岸部の工業地帯に見立てた作品(手前)の中央には穴が開き、下の階からのぞくことができる。奥は厳島神社をモチーフにした作品

人為的に作られる歴史を示唆

ダミアン・ハースト展

ビエンナーレとは別だが、ベネチアで話題となっていたのが、死んだ動物をホルマリン漬けにした作品で知られる英国の現代美術家、ダミアン・ハーストの展覧会だった。

パラッツォ・グラッシとパンタ・デラ・ドガーナという二つの美術館を使った個展は、準備に約10年をかけたという。テーマ、作品、費用などあらゆる面でスケールの大きさを感じる。

ハーストは、約2000年前の沈没船から、古代の美術品や工芸品などが発見されたという物語を作成。それに沿って、大理石やブロンズで作った神々の彫刻、青銅器、武器、仏像などを並べた。

数々のコインから高さ18cm超の巨大立像までサイズも様々。精緻に作り込まれたサンゴやフジツボといった付着物、傷やさび、作品を海に沈めて撮影した写真や動画が迫真性を高める。そこにミッキ



巨大な彫刻が並ぶ会場
Photographed by Prudence Cuming Associates ©Damien Hirst and Science Ltd. All rights reserved, DACS/SIAP 2017

ーマウスの彫刻が紛れていなければ信じてしまいそうになる。この壮大な「どっきり」は、歴史はしばしば為政者の都合などによって「人為的に作られる」ことを示唆している。それは、干潟に無数の杭を打ち込むなどして人工的に作られた土地に築かれたベネチアの街の成り立ちとも符合しているようだった。12月3日まで。

館での上演は、負の歴史を意識させつつ、ナショナリズムの台頭や「内向き」志向といった現状や未来への警鐘と捉えることもできる。

広島在住の岩崎貴宏の個展で臨んだ日本館は、一部が壊れた厳島神社の模型、タオルや手ぬぐい、黒いビニールを山や工業地帯、石油掘削装置に見立てた立体作品など7点を展示した。

会場中央の床には穴が開いていて、床下にある階段を上ると顔を出してのぞくことができる。その様子は海坊主が海から出てきたようで、エン

ターテインメント性がある。しかし、作品が扱っているテーマは、災害、原子力発電や油田開発などに象徴されるエネルギーや領土問題など日本が抱える課題だ。

政治が混乱している韓国館は、未来への不安を表現した顔のない親子の像を展示。経済破綻により自国通貨の価値が失われたジンバブエ館には、米ドル札を描いた絵画が掲げられた。また、イラク館では、イスラム過激派組織「イ

スラム国」と敵対するクルド自治区の軍隊に従軍したベルギー出身のアーティストのス

国	作家	執筆者	文献タイトル	媒体名	発行日	頁	発行元	展覧会名
J	菅木志雄		参加型作品 観客と対話	読売新聞	2017年6月8日 第50789号	p.19		